

ら但し書きを必要としない<sup>11)</sup>のであり、当時北方諸国のみならずヨーロッパ各国の歌謡編纂のよき前例となったのである。前出の Francis James Child (1825-90) も1872年より S. Grundtvig の助言を得て、1888-98年にかけて The English and Scottish Popular Ballads 5 vols, 英蘇古謡集, を出版したのであった。

DgF 成立の過程を年代順に追ったところですでに紙数は尽きた。初代編集者の現存する伝承歌謡の選別, 分類, 収集資料の扱い方, 印刷されている, あるいはされていない出典に対する編集姿勢, とりわけ最も興味あるデンマーク最古の手書き稿本を含む40余りの大小貴族写本などについては, 次の機会を待って稿を改めることにする。

(北欧文学科助教授)

註

- 1) DFS=Dansk Folkemindesamling
- 2) Jørgen Lorenzen : Et hundrede udvalgte danske viser I—II, 1974, bd. II s. 349  
以下 Lorenzen と略す。
- 3) 原一部 : バラッド研究序説, 南雲堂, 1975, s. 9
- 4) Lorenzen, bd. II s. 327
- 5) Nogle Folkeviseredactioner, 1906
- 6) Lorenzen, bd. I s. 15
- 7) DgF I s. x
- 8) DgF X s. x
- 9) Dansk Litteratur Historie, Politiken, 1971, bd. 1 s. 82
- 10) Carl S. Petersen : Fra Folkevisestrident, DS 1905, s. 65 ff.
- 11) Iðrn Pið : Svend Grundtvig og hans folkeloriske Arbejdsmetode, DS 1971, s. 91 ff.
- 12) Erik Dal : Plan for Udgavens Afslutning, DS 1955, s. 63 ff.
- 13) DgF XII s. 210
- 14) Lorenzen, bd. I s. 9
- 15) DgF 歌謡通し番号
- 16) DgF V, Forord af Samfundet til den danske Literaturs Fremme
- 17) 前出註<sup>12)</sup>
- 18) 前出バラッド研究序説, s. 9
- 19) Lorenzen, bd. II s. 359
- 20) Iðrn Pið : The medieval ballads of Denmark, Oral-Literary Tradition, Odense Univ. Press, 1977, s. 69 ff.
- 21) Jørgen Lorenzen : Danmarks gamle Folkeviser 1853—1976, DS 1977, s. 5  
なお本稿で使用した DgF は下記の版である。  
DgF=Danmarks gamle Folkeviser I—X, fotografisk optryk, København 1967  
XI—XII, original trykning, København 1976

1958年 DgF X 第5分冊(追録158-182) Karl Ivar Hildeman 編, スウェーデン語のまま収録されている。

1958年 DgF XI 第3分冊(メロディ篇115-229) H. Grüner-Nielsen の遺稿をもとに Nils Schiørring, Thorkild Knudsen 編。

1960年 DgF X 第6分冊(追録183-254) H. Grüner-Nielsen の遺稿をもとに Erik Dal と Iørn Piø 編。

1961年 DgF X 第7分冊(追録255-304) Erik Dal, Iørn Piø 編。

1963年 DgF X 第8分冊(追録305-386) Erik Dal, Iørn Piø 編。

1965年 DgF X 第9分冊(追録387-539) Erik Dal, Iørn Piø 編。

66-67版 : DgF X (追録1-539), 1933-65。

内訳 : 第1部 (1-182), H. Grüner-Nielsen, Karl Ivar Hildeman 編, 1933-58。

第2部 (183-539), Erik Dal と Iørn Piø 編, 1960-65。

DgF X は 1-539までそれぞれの歌謡に関して新たに研究された, あるいは収集された資料の一大集成である。

1966-67年 複刻版 DgF I-X 刊行。既刊分 I-X の修正なし再刊行, 但し国際的見地からデンマーク語を解さない読者のためにほとんどの巻に簡単な英文紹介がなされる。すなわち I-VII, X 巻に英文序文が補充された。

1976年 DgF XI メロディ篇, Thorkild Knudsen, Svend Nielsen と Nils Schiørring 編, 英文解説付き。さらに次の複刻版を付録として収めている。

A) Færøske Melodier til danske Kæmpeviser, 1923, デンマーク英雄歌謡のフェロー島メロディ, Hjarmal Thuren, H. Grüner-Nielsen 編。

B) DgF XI 第1-3分冊, 1935-59, H. Grüner-Nielsen 編。

1976年 DgF XII, I-X の索引篇, Erik Dal 編, 英文解説つき。

A : 主要語彙, タイトル, 首句, リフレイン, 用語索引, Sven H. Rossel 作成。

B : 名前, 人名, 宗教名, 地名索引, Rikard Hornby 作成。

C : 出典 I, 印刷物 (1枚刷, 歌謡集, その他)。

口誦伝承 (記録者, 資料提供者, 無名記録者, 無名提供者)。Sven H. Rossel 作成。

D : 出典 II, 貴族および庶民の手書き稿本に関する詳細な記述および目録統計。Erik Sønnerholm 作成。

かくして DgF はようやく終着駅に到着した。全12巻11分冊, 本文合計7000余頁, 見出し歌謡は539篇, 所収された変形派生歌謡などすべてを含めると3000以上の歌曲となる。ちなみにイギリスのチャイルドバラッドの所収歌謡は305篇<sup>18)</sup>であるという。しかし S. Grundtvig も「試論」(DgF I 試案 s. 32) でデンマークが保有する古歌謡は他のヨーロッパ諸国に比して数の上で圧倒的に多いことを強調しているのであるが, そのなかみは言葉の真の意味でデンマーク本来のものではないのであって, Lorenzen の次の叙述は, デンマーク民衆歌謡の本質を静観して味わい深い。「DgF はヨーロッパ的見地から見ると, 小国の文化的産物などというものではなく, もともとそれは第二次, 第三次の借り物なのである。この様式は外国に発生した。しかし静かな水は沈澱の一条件である。歌謡は文化の変遷がよりゆるやかなところによりよく保存される」。<sup>19)</sup> DgF 編纂に関して近年とみに民俗学者<sup>20)</sup>の間から厳しい批判があるが, 毀誉褒貶を越えて, DgF 編集の基本方針は首尾一貫, 「前世紀半ばの第1巻と今世紀半ばの第X巻を同時に併用してもなん

66-67版 : DgF VIII (467-489), デンマーク騎士歌謡 III, Romanviser 仮空的歌謡, Axel Olrik と H. Grüner-Nielsen 編, 1905-1919。

1920年 DgF IX 第1分冊 (490-521)。

1923年 DgF IX 第2分冊 (522-539)。

66-67版 : DgF IX (490—539), デンマーク騎士歌謡 IV, Sene lyriske viser, 後期抒情歌謡, と新たに発見されたものを含む。H. Grüner-Nielsen 編, 1920-23。DgF VIII と IX はここでは合本になっている。

1933年 DgF X 第1分冊 (追録1-76)。DgF X は既刊 I—IX への追録篇である。だが、増大する資料の追加ばかりでなく、新たな研究にふまえた、既成の評価の訂正がせまられる場面もでてくる。したがって追録篇は S. Grundtvig と Axel Olrik の解釈の軌道修正の役割をも果している。

1935年 DgF XI 第1分冊 (メロディ1-50)。

1938年 DgF XI 第2分冊 (メロディ50-115)。

DgF X 第2分冊 (追録76-112)。

1943年 DgF X 第3分冊 (追録112-140)。1860年代に支配的であった二、三の仮説がここで修正を余儀なくされる。① Kæmpeviser は最早北欧共通のものでなく、源はノルウェー、フェロー諸島にあるということ。② デンマークの古い歌謡に英雄歌謡形式の影響がみられる場合、それは最早歌謡の古さを証明するきめてにはなり得ないということ。③ 貴族手書き稿本は中世から伝承した素材を記録しているという従来の通説が疑問視された。最も重要な点は歌謡成立年代についてである。S. Grundtvig によると歌謡はの中で歌われている歴史的出来事や人物に近い時点で生成されたもので、歴史的イベントの生起順に歌謡成立の年代は対応するとする。しかし、歌謡が同時代の出来事や人物に依存しなければならない理由はない。後世の者が有名な祖先を歌謡で想起する場合もある。また歌謡を面白くするため任意に歴史の中から事件や人物を取り出してくることも考えられる。歴史的な歌謡の場合には、扱われている出来事なり人物なりは空想をかき立てるための手段となっているのかもしれない。そして前出註<sup>9)</sup>のように歌謡生成年代が大幅に修正されることとなったのである。その他 E. v. d. Recke の Vestnordisk Indflydelse i Dansk, 1907, 西スκανジナビア語のデンマーク語への影響, ノールウェー人 Knut Liestøl の Norske trollvisor og norrøne sogor, 1915, ノールウェー超自然歌謡と北方サガ, についての論文, あるいはスウェーデン人 Sverker Ek の Norsk kämpavisa i östnordisk tradition, 1921, 東スκανジナビアの口誦伝承におけるノールウェー英雄歌謡, などあまたの諸研究は DgF 解釈に新風を吹き込んだのである。

1948年 DgF X 第4分冊 (追録140-158)。

1953年 H. Grüner-Nielsen 死去。彼は DgF X 第5分冊をスウェーデン人 Karl Ivar Hildeman の学位論文 Politiska visor fran Sveriges senmedeltid, 後期中世スウェーデン政治歌謡, 1950, を待って刊行する積りであった。論文検討の余裕はあったものの、自分の作業に導入するに至らなかった。

1954年 UJDS の要請で Erik Dal が残された部分を引き続き編集することになる。この時 Erik Dal は編集見通し<sup>17)</sup>を提出している。爾来約20年間の DgF 最終局面となる。Erik Dal と Iðrn Pið の追録の残部, Nils Schiørring, Thorkild Knudsen や Svend Nielsen のメロディ篇, そして索引篇が続く。しかし DgF X 第5分冊の解説はスウェーデン人 Karl Ivar Hildeman にゆだねられた。

されている。これらの新しく収集された歌謡が DgF を通して日の目を見ることができるとか、今後の編集を支える十分な財源が見つかるかどうかにかかっている<sup>16)</sup>」という言葉を残して名実共に解消した。

66-67版 : DgF V (255-314), 1877-90, Ridderviser med kvindelig hovedperson og fortrinsvis ulykkelig udgang, 女性主人公の騎士物, 多くは不幸な結末に終るもの。

内訳 : 第1部 (255-285), S. Grundtvig 編, 1877-78。

第2部 (286-315), Axel Olrik 編, 1889-90。

1895年 8月 DgF VI 第1分冊 (316-340)。

これより UJDS, 大学記念出版会, が形式上の責任をとることとなり, Carlsbergfond, カールスベア財団, が経済的援助をするようになる。また装丁が一新する。VI—IX の4巻は DgF という従来の名称に, Danske Ridderviser, デンマーク騎士歌謡, I—IV のサブタイトルが併記される。Joachim Skovgaardのイラストによる新しい装丁は, 王家の楯の紋章と古歌謡に登場する各地方の貴族のそれを配したもの。複製版では色彩が不明であるが次のような楯がみられる。三頭のライオンが並ぶ王家の楯を中心に, 右手に東西ユランの楯, 左手に北ユランのものが上から下におかれている。Marsk Stig 家の七角星, Limbekke 家の切り込み平行斜線のある楯, Buske Westens 家のリス, Strangesønner 一門の中央を境に上下に二分される楯, Banner 一門の斜に二分される楯, Bugge 家のいのしし。最下段にはスコーネとジーランドの氏族のもの, すなわち Bo Falk 家の中心から放射状に発した三本の線で三つに分かれたもの, Rane Jonsøn 家の鹿の枝角, Brahe 家の中央縦に切り込み模様のある楯。騎士歌謡全4巻は同一装丁である。

1896年 DgF VI 第2分冊 (340-362)。

1898年 DgF VI 第3分冊 (362-386)。

66-67版 : DgF VI (316-386), デンマーク騎士歌謡 I, Ridderviser med mandlig hovedperson, især om fejde, hævn og ulykke, 男性主人公の騎士物, 特に不和, 仇討ち, 不幸に関するもの。Axel Olrik 編, (1895-98)。

1899年 DgF VII 第1分冊 (387-400)。

1900年 DgF VII 第2分冊 (401-425)。

1902年 DgF VII 第3分冊 (425-443)。

1904年 DgF VII 第4分冊 (443-466)。

66-67版 : DgF VII (387-466), デンマーク騎士歌謡 II, Ridderviser med mandlig hovedperson, især kærlighedsviser, 男性主人公, 特に恋物語。Axel Olrik 編, 1899-1904。

1905年 DgF VIII 第1分冊 (467-475), 約10年間の第二次計画通りの刊行の後, ふたたび編集はとどこおり勝ちになる。Axel Olrik が別の定期的な編集をも手がけるようになったからである。デンマーク語およびデンマーク文学に関する学術誌 Danske Studier (1904年創刊) や Fra Danmarks Folkeminder (1908年創刊) デンマーク民俗学会報, あるいは Dansk Folkemindesamling デンマーク民俗資料編纂所の設立 (1904年) などの仕事に追われたからである。特に1911年の夫人の死は Axel Olrik の活力をいちじるしくそいだ。

1907年 DgF VIII 第2分冊 (475-480)。

1912年 DgF VIII 第3分冊 (480-484)。

1917年 Axel Olrik 死去により DgF VIII の最終分冊は H. Grüner-Nielsen に引き継がれ, 編集は第三局面にはいる。

1919年 DgF VIII 第4分冊 (484-489)。

1862年—63年冬 DgF III 第2分冊 (145-182, 追録)。

66-67版 : DgF III (112-182, 追録)。Historiske viser, 歴史物歌謡, S. Grundtvig 編, 1858-63。

1869年 DgF IV 第1分冊 (183-205G), これよりいわゆる Ridderviser, 騎士物歌謡, の編集がはじまる。古代北方の事蹟に関するものでなく, 一般信仰でも, またデンマークの歴史にも関係しないものであるが, 貴族の日常の生活を扱っているなのでこの名称がある。Ridderviser は DgF 見出し歌謡全体の3分の2を占める。

1870年 DgF IV 第2分冊 (205-234F)。

1872年 DgF IV 第3分冊 (234F-254)。

1876年 DgF IV 第4分冊 (追録1-29)。

編集のテンポは次第に衰えをみせてくる。1863年から S. Grundtvig はコペンハーゲン大学で教壇に立つようになり, 69年には教授になる。職務のかたわら72年には N. F. S. Grundtvig の遺作品集刊行も手がけねばならなかった。イギリスの古歌謡編纂者 F. J. Child に助言が積極的になされたのもこの頃である。この年はすでに刊行された歌謡への追録だけで終わった。

1877—78年 DgF V 第1-2分冊 (255-285)。

1883年 S. Grundtvig 死去, DgF IV 第5分冊 (追録29-56) は死後出版となる。

66-67版 : DgF IV (183-254), Ridderviser med kvindelig hovedperson og fortrinsvis lykkelig udgang, 女性主人公の騎士物, 多くは happy end. S. Grundtvig 編, 1869-83。

1886年3月30日 DgF 発行元のデンマーク文学振興会は総会で S. Grundtvig の死去で未完となった DgF V の完結を「委員会」付託とし, 完結の時点で振興会の解散を決議する。そして後任の編者の打診がはじまる。

1888年春 Axel Olrik が DgF 作業引き継ぎを申し出る。この申し出は, Ludvig Wimmer 教授 (1839-1920, 北欧語学者) の監修を条件に「委員会」に承認される。

1888年5月4日 「委員会」は今後の作業計画をたてる。① DgF V の未完の部分を1890年以内に完結させること。②前編者の基本方針は不変であるが, 作業の進展をはかるため, 短縮した編集方法がとられるべきこと, つまり歌謡の紹介をできるだけ短くすること。外国語のテキストは追録の中にいれないこと。Evald Tang Kristensen の Jyske Folkeminder, ユランの民俗, に収録されているテキストは採らないこと, 但し他の記録にその歌謡がみられない場合はこの限りではない, などである。こうして Axel Olrik (1864-1917) により DgF の第二局面がはじまった。Axel Olrik は1881-83年の間, S. Grundtvig の弟子であった。子供のない Grundtvig の家庭に息子同然に受けいられていたが, 勉学中であること, またその後は彼自身の研究テーマ Saxo に没頭していたため, Grundtvig の残した DgF 編纂を直ちに引き継ぐことができなかったのである。

編集の再開にあたっては, すでに王立図書館の管理下に置かれていた S. Grundtvig の遺稿を基にして, DgF V の後半 (286-315) が作成された。したがって Axel Olrik 自身の編集はその後の316-484である。485-539は三代編者 H. Grüner-Nielsen (1881-1953) の手になるものである。

1889年 DgF V 第3分冊 (286-301)。

1890年11月 DgF V 第4分冊 (302-315), これを以って第V巻完結, 同時に1886年すでに解体が決定していたデンマーク文学振興会は, S. Grundtvig の死以前から DgF 資料は増加する一方であった。第V巻の終了した現在, 今までの巻が所収したと同程度の多くの未公開歌謡が残

ンマークの諸兄弟姉に告ぐ。ここで S. Grundtvig は、いまだ残存する歌謡を書きとめることの重要性のみならず、民衆歌謡と内的関連のあるメロディをも記録することの意義を強調する。<sup>13)</sup> Kæmpeviser とは巨人や武人をテーマにしたバラッドの謂であるが、DgF I の序文で S. Grundtvig は「デンマーク最古の詩歌は中世から伝わる folkesange であり、それは通常 kæmpeviser といわれる」としている。それはかつて全バラッド様式の包括的名称であった。複製版英文序文では legendary ballads となっている。

1843年12月29日、1844年1月5日 S. Grundtvig, 引き続き Dansk Folkeblad に寄稿, Om en ny Udgave af Danmarks Kæmpeviser, デンマーク英雄歌謡の新編纂について。これらの呼びかけは父の友人やその関係者以外にはさしたる反響を呼び起さなかった。だが次の10年間の第1次歌謡収集の原動力となった。

1847年2月 S. Grundtvig, Samfundet til den danske Literaturs Fremme, デンマーク文学振興会, の要請で Plan til en ny Udgave af Danmarks gamle Folkeviser, デンマーク古民衆歌謡新編纂計画書, を作成提出した。

1847年8月 上記「計画書」に三つのバラッドを加えた Prøve「試案」が印刷発行される。

1847年12月 「8月試案」に対する各界の攻撃に S. Grundtvig は激しく論駁, 「12月試案」として再度発行。これは48頁の「計画書」のうち17~21頁は8月のそれと全く同じもの。22~46頁は論争精神に満ちた解説となっている。反対者は言語学者の Chr. Molbech (1783—1875) をはじめとする古典的言語学を基盤とした学者たちで, S. Grundtvig の「伝承されているあらゆる形を網羅する」という編集方針に反対する。「なまの, ただ言語学者あるいは文献学者にのみ有用な資料群を印刷発行するのは無能にして無益である。理性的な, かつ学問的な成果として各歌謡を, 存在するいちばん完全な, いちばん正しい歌曲で伝えるべきである」とする。反対者は伝承されているものの背後に確実に捉えることのできる原句の, 多少なりとも信頼できる手書き稿本があるとみていた。それに反し S. Grundtvig は gammel folkevises vilkaar, 民衆歌謡の状態, を知っていた。ペンの助けなしに地方に拡散し, あるいはお互の言葉を解さない国々に伝わっていった古い歌謡の原初の形を示すのが問題なのではなくして, 「編者の手に入れたデンマーク古民衆歌謡のすべての opskrift, 記録, を伝えると同時に, 忠実に慎重にできる限りの解説を加えて人々に示すことが肝要である」とする。修正と補綴を当然のこととみなす伝承歌謡の古典的編纂の中で育った言語学者や, 純粋に美学的研究の中で育った文学者の目には, DgF 歌謡はしばしば極めて改悪されたものとして映った。しかしこの Folkevisestrød, 民衆歌謡論争, は急速に燃えつきた。

1851年9月18日 DgF 予約販売の声明。予約募集の声明文は DgF I 序文の冒頭に引用されている。

1853年2月 DgF I 第1分冊 (1<sup>15)</sup>-16A) 刊行。

1854年2月 DgF I 第2分冊 (16B-32, 追録)。

上記二冊は66-67複製版で次のように一冊に合本: DgF I (1-32) Kæmpeviser, 追録および試案。S. Grundtvig 編, 1853-54。

1854年4月 DgF II 第1分冊 (33-71)。

1856年4月 DgF II 第2分冊 (72-114, 追録)。

66-67版: DgF II (33-95) Trylleviser, 超自然歌謡。

(96-114) Legendeviser, 伝説歌謡。S. Grundtvig 編, 1854-56。

1858年8月 DgF III 第1分冊 (115-145)。

成り立ちを前者と同じ共通の古北方時代までさかのぼって、今から1000年以上も前のこととする。そしてデンマーク中世歌謡をゲルマン伝説や Saxo の年代記の根底にあると S. Grundtvig が推定する共通の伝承歌謡からの直接派生<sup>7)</sup>とみた。しかし19世紀の終りからすでにこの日付け算出は余りにも早すぎることが確認されていた。今日では英雄歌謡は最も若いグループに属するとされているのである<sup>8)</sup>。

中世歌謡にはもう一つ避けて通ることの許されない難所がある。だれがそれをつくったかという問題である。歌謡の原形を知る者はいない。いつの日にか歌謡は存在するようになり、そのとき原初の形をもっていたはずである。しかしだれが作ったのであろうか？ 浪漫派の Johan Ludvig Heiberg はスカンジナビアの古歌謡は民衆から発生し、それから宮廷にひろまったと説いた。若き S. Grundtvig の考えもいわゆるこの *produktionsteori*, 生産説の流れを汲むもので、DgF I の付録の「試案」をみると、「民衆が作者である。民衆歌謡の詩人は民衆という個体であって、特定の個人ではない」とある。ところが後には「万人があとについて歌うとき常に特にすぐれた才能が存在する」として、この卓出した存在に貴族を想定した。そして文学史家 F. J. Billeskov Jansen 教授は、S. Grundtvig が民衆生産説から *receptionsteori*, 民衆受容説に移行していったと指摘<sup>9)</sup>している。これは立脚点や表現の相異こそあれ前出「バラッド研究序説」第4章の集団制作説 *communal authorship* と個人制作説 *individual authorship* に対応するものである。いずれにせよその原初の形を求めるすべはないが、それぞれの歌謡の背後には単一の創造的精神が存在したこと、そして騎士層から民衆へと伝播し、さらに民衆の中で自然淘汰されて今日に至るといのが現在の大方の見方である。

中世民衆歌謡は実用芸術としてはもはや生きていない。しかし多くの歌謡は手にペンをもってルネッサンスの時代に記録されるようになり、現存の貴族手書き稿本となる。また Vedel の歌謡選集、ずっとくだって浪漫派のそれや S. Grundtvig の DgF となるのである。口誦によって残存するものは Evald Tang Kristensen の *Jyske Folkeminder I-XIII, 1871-97*, ユランの民俗、に3000にもものぼる歌謡収集がなされている。

## (二)

DgF については従来 *Danske Studier* 誌(以下 DS と略)が発表の場であった。出版経過の報告のみならず DgF をめぐる論争、その間にも死亡した関係者の追悼記事など内容は多様である。(DS の発行元は *Universitets-Jubilæets Danske Samfund*, 大学記念出版会、で、DgF I-V の発行元であるデンマーク文学振興会の解散後、DgF 刊行を引き継いだ。以下 UJDS と略。)例えば Carl S. Petersen の DgF 編集方針をめぐる論争<sup>10)</sup>を詳述したもの、*Iørn Piø* の民俗学の立場から見た S. Grundtvig 批判<sup>11)</sup>, また4代編集者 Erik Dal の DgF 出版完結の見通し<sup>12)</sup>などもみられる。Erik Dal はその他1966-67年の複製版の英文序文でも DgF 出版をめぐる多くの逸話に言及している。また同じ著者の、*Nordisk Folkeviseforskning siden 1800, 1800年以後の北欧民衆歌謡研究, 1956*, ではさらに詳しい記述がある。

DgF は66-67複製版で10巻9冊にまとめられているが、それまでは各巻いくつかの分冊ごと逐次出版されていた。以下 DgF 刊行の長い過程を年代順に辿りながら一瞥してみよう。

1843年12月8日 S. Grundtvig は友人でもあり師でもある C. S. Ley と共同署名で *Dansk Folkeblad* に寄稿、*Om Kæmpeviserne, til danske Mænd og Qvinder*, 英雄歌謡について、ダ

ところで本稿ではデンマーク語の（その他のスカンジナビア語の）*folkeviser* (r) を民衆歌謡と訳出しているのだが、この名称に関しては古くから論議が絶えないようである。デンマークでは文学者、あるいは文学史家の間で好んで用いられている *folkeviser* は元来 *gamle folkeviser*, つまり *old folksongs*, *medieval ballads* を指す。形体からいえば二行または四行連句で、リフレインがあり、また読み人知らずの歌謡である。DgF の1966-67年複刻版（以下66-67版と略）第I巻の英文序言で Erik Dal は、「この名称は現在 *ballade* で置きかえられようとしている。なぜならばバラッド様式は本来より高い階級に発生したものであるから不適當である。……この様式を包括する用語はデンマーク語にはない」といっている。*medieval ballads* のカテゴリーに属するものを400年前、Vedel は *danske viser* と呼び、くだって1800年頃までは *kæmpeviser*, *heroic ballads* が中世伝承バラッドの総称であった。そして S. Grundtvig やその他の浪漫派の詩人たちは *gamle folkeviser* と呼んだ。しかしすでに慣例になっているとはいえこの名称をめぐる、民衆歌謡の機能に重きを置く民俗学者、あるいは伝承研究者と、収集された文献から出発する文学者の間に意見の相違が連綿として存在している。民俗学者にとって中世バラッドは *folkeviser* の多くの様式の一つに過ぎないのである。*Folkeviser* は文字通り解するならば民衆が歌っている歌でなければならない。あるいは民衆の中で、つまり学識ある貴族に対して多教を占める文化社会層を構成する庶民の中でつくられたものでなければならない。しかし文学史家のいう *folkeviser* は民衆が歌った、あるいは歌っていた歌の一部に過ぎないし、また貴族によってつくられたものであるからである。しかし Jørgen Lorenzen<sup>2)</sup> が指摘しているように、1895年 Axel Olrik は中世バラッドに登場する貴族の概念により広い解釈を与えた。「騎士とか姫とかの名をもつものはただ大きな地所と宮廷を中心とした集団が本体の極くわずかの国民の一部に過ぎなかつたのであろうか、あるいは実際にはより広い層であつたのではなからうか」と問いながら、後者の見方に傾いていく。なにしろ貴族がみずからすきをひく (Torbens Datter, DgF 288) 時代である。Lorenzen も *folkeviser* が領主と百姓の共通の文化から生まれて育つたとする考え方を、それが文字であらわされていない歌謡である場合、正しいとしている。また別の面から *folk* という概念に迫るものとして、原一郎氏の「バラッド研究序説」<sup>3)</sup> からの引用をゆるしていただきたい。「伝承バラッドを *folk ballad* と呼ぶのは当を得ていないとする説もあって、その所論に従えば、上は貴族から下は農夫にいたるまでうたわれ、またその聴き手も社会のあらゆる層の人々であつたからという。しかし、W. P. Ker は *Everyone, as far as poetry is concerned, belongs to the folk.* としている。(Form and Style in Poetry, 1966, p. 33)」本稿では中世バラッドと呼ぶのにデンマークの文学者たちの愛着する<sup>4)</sup> *folkeviser* なる用語をそのままととしても、今様 *folksongs* とのイメージ混同をさけるため、民衆歌謡と訳出した。

バラッド様式はフランスで舞踏歌として発生した。それが直接間接に大体1200年頃デンマークに伝えられた。Ernst von der Recke<sup>5)</sup>によると生きたデンマーク民衆歌謡の流れを次のように三つの時期にわけている。i) 大体1200年にはじまり1350年まで続く黄金時代。この時期のものはオリジナリティ<sup>6)</sup>と詩的味わいは豊潤であるが、数的に僅少であるとする。この場合オリジナリティとは美学的な意味の独創性、完成度として捉えるべきものである。古い出典によると Es-kilsø (北ユラン) の修道院で僧侶たちが1170年に歌に合せてダンスをしたという。しかしなにを歌ったかは不明である。ii) 次に1350~1500年の *romanviser* の時代。大量生産の時代で、わずかの才能とわずかの素養があれば即興的に歌をつくることができた時代。iii) 最後に次の200年間。ここでは歌謡は生きた歌としての生命を終え、収集の時代、文学的再話の時代と続く。

ところが当時 S. Grundtvig は、北方神話やゲルマン伝説物語とテーマが一致する英雄歌謡の



# Danmarks gamle Folkeviser, デンマーク古民衆歌謡集

## その編纂をめぐってひとつのアプローチ

山野辺 五十鈴

(一)

1976年 *Danmarks gamle Folkeviser* (以下 *DgF* と略) は、第 XI 巻メロディ 篇と第 XII 巻索引篇を完結し、1853年の第 I 巻刊行にはじまる123年間の一大編纂に幕をおろした。この長期編集に当然予想されるであろう紆余曲折の道程を辿りつつ、伝承バラッドの諸問題をいくつか垣間見るとというのが本稿のさしあたっての意図である。しかし最終目標は、アイスランドサガに匹敵するとしてデンマーク国民の自負するデンマーク中世民衆歌謡そのものであることはいうまでもない。

デンマークの伝承バラッド編纂は1591年にさかのぼることができる。その年 *Anders Sørensen Vedel* は *It Hundrede vduaalde Danske Viser, Ribe*, デンマーク歌謡百選, を編集出版した。その後10回以上も版を重ねるが、1695年 *Peder Syv* がさらに100曲加えて *Et Hundrede udvalde Danske Viser, Forøgede med det Andet Hundrede Viser, Om Danske Konger, Kæmper og Andre*, デンマーク歌謡百選, 追加百曲, デンマークの王, 英雄, その他について, を出版した。19世紀には浪漫派の *W. H. F. Abrahamson*, *R. Nyerup*, *K. L. Rahbek* による *Udvalgte Danske Viser fra Middelalderen I—V, 1812—14*, 中世デンマーク歌謡選集, がある。一方, イギリス, ドイツ, スウェーデンで19世紀の前半に重要な歌謡編集が次々に刊行された。特に *William Motterwell* の *Minstrelsy, Ancient and Modern, Glasgow, 1827*, と *A. J. Arwidsson* の *Svenska fornsanger I-III, Stockholm, 1834-42*, は *DgF* のよき前例となった。前者三書のように単なる選集ではあきたらず, 現存するすべての古い民衆歌謡を網羅するもの, しかも後者二書のように言語学的に緻密な考証をそなえたものというのが *DgF* 構想の母体であった。

1838年 *Svend Grundtvig* は父親でもあるデンマークの代表的詩人の一人 *N. F. S. Grundtvig* から, 入手したばかりの17世紀の民衆歌謡手書き稿本 (*Grundtvigs Kvart DFS 25.4°*, グルンドヴィ四折本)<sup>1)</sup>を14歳の誕生日のプレゼントとして贈られた。以来 *S. Grundtvig* の前には民衆歌謡への道がえんえんと続くことになる。このとき, *S. Grundtvig* は浪漫派の歌謡集がまったく不十分であるのに気づく。まずそれが16~17世紀の各種手書き稿本を含まないということ, 特に1820年 *Grundtvig* の先達, 民俗学者の *Just Mathias Thiele (1795—1874)* によって発見された重要な *Adelsvisøbøger*, 貴族手書き稿本, の一つ *Karen Brahes Folio*, カーレン・ブラーエの二折本, を知らないということ, 第二に *Abrahamson* らは二, 三の例外を除いて現存する口誦伝承に依拠しなかったという点に重大なる欠陥を見出した。これらの不備を補うべく, 新たに民衆歌謡編纂の構想を抱くようになる。